# 西洋建築史および都市計画史の導入授業のあり方に関する一考察

飯野　秋成[*1]

## 1．はじめに

「建築史」「都市計画史」は、建築を志す高校生や大学生のための必修の科目と位置付けられる。歴史的建造物のマニアに近い大学生が、嬉々としてこれらの勉強に取り組む姿に出会うこともないわけではないが、大半の学生諸君は、建築物の名前、建立年度、そして建築家の名前の組み合わせを、難しい顔をしながら記憶しようと努めているのが現状である。

筆者はこれまで、大学建築系の授業で計画や設計製図を担当するほか、一級建築士等の建築系資格試験対策の予備校においても10年以上、建築計画や建築史のレクチャを担当してきた。建築系資格試験の建築史の問題には、毎年微に入り細に入りといった出題傾向もみられ、予備校の授業を受講されている業界の方々でさえも、なかなかに苦しめられている。その中で筆者は、各論に入る前段として、世界史、特に古代～近世の文化史と、近代デザイン史の大まかな枠組みを先にレクチャする試みを続けてきている。これにより突破口が開けた、と私に語ってくれる大学生や予備校生が毎年少なからずいることをここ数年経験してきている。

ここでは、西洋建築史および都市計画史を取り上げ、各論に入る手前の文化史、および近代デザイン史の枠組みを提示する筆者のレクチャのイメージをご紹介したい。同じくこの分野の先生方と、導入授業のあり方に関する議論をしてみたいという気持ちもあり、本稿がそのたたき台となれば、と思っている。

## 2．西洋建築史；古代～近世

西洋建築史を勉強しようとする大学生や予備校生の大半は､「理系」に位置付けられている。世界史は入試科目でもなく、本気で勉強したことがないとすると､「古代ギリシャ」や「ルネサンス」や「産業革命」といわれてもピンとこないのがデフォルトの学生の姿なのだろう。

とすれば、世界史の枠組みのうち、政治史、経済史はバッサリ切ったとしても、文化史の枠組みだけは頭に入れもらうことが先決である。これが筆者の思う「西洋建築史」のレクチャの出発点である。

私の場合、まず、図１を板書する。図中の傍線部を横

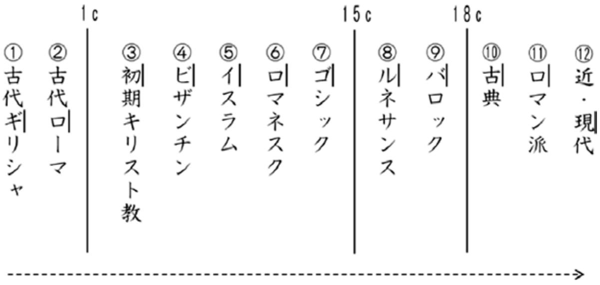


図１　西洋建築の様式史に関する板書の例

読みすると「ギロ／ショビイロゴ／ルバコロゲン」となるので、10回暗唱させる。これが人類のここ3000年の様式の流れであるから、ここだけは無理にでも覚えなくてはその先に進めないと思う。ちなみにこの流れは、建築だけではなく、絵画、彫刻、音楽、文学にもほぼ共通であることを話すと、納得して暗唱を頑張り始める学生も多くなる印象がある[注1)]。

### 1）③～⑦の建築様式の変化を掘り下げる

1cのラインはキリスト教の誕生のラインである。当初、キリスト教信者は、ローマ帝国で迫害されて地下で祈っていたこと、また、キリスト教の公認後の③は地上の小さな集会所で祈るようになったことを、まずは話題にしたい。

次に、具体的な建築様式の話題にやや踏み込む。例えば、③では屋根は低かったが、④から⑦へと、祈りの空間はだんだんと極端な高さを追求するようになっていく。神に近づこうとするように…。また、⑥は小さい窓の壁構造で中は真っ暗であるが（例えばピサ大聖堂(1118）を見せながら)、⑦になると柱とアーチで持たせる構造となり、バラ窓を設けることで中はとても明るくなる(例えばノートルダム大聖堂(1250)を見せながら)。技術志向の学生などに向けては、石工（メーソンリー）によって建設技術が飛躍的に高められたことなどに思いを馳せてもらうのも悪くないだろう。

### 2）⑧の時代における人々の意識の大転換を掘り下げる

15cのラインは、バスコ・ダ・ガマ、マゼラン、コロンブスの大航海時代に相当する。地球が丸いことが明らかとなって「神様はいない」と悟る人々や、東西交易や南北交易が盛んになって｢お金さえあれば｣と考える人々が現れる。

そんな時代背景の⑧における建築様式は、建物の高さの追求よりも、むしろ人間目線から均整のとれたプロ

*1　いいの　あきなる
新潟工科大学工学部工学科　教授
〒945-1195　新潟県柏崎市藤橋1719

ポーションの追求を目指す。古代ギリシャ時代に発見された黄金比を用いた建築物が作られたり、製図で習得させられる透視図法が発達したり、などのことがこの時代の必然であったことにも気づかせたい。ブラマンテ（1444-1514）のテンピエット（1510）など、ルネサンス建築の１つの完成形が現れることも、人間目線からの建物写真を使って話題にしたい。

**３）歪んだ真珠、の意味を掘り下げる**

⑧の時代に、ルネサンス建築の完成形まで現れてしまうと、当時の芸術家たちの気持ちとして、「新しいことをやってやろう」と、あえて均整を破る作品を制作し始めることにもなる。⑨の時代に活躍したダビンチ、ミケランジェロ、ラファエロらの絵画はどこか一癖あったりするし、音楽ではバッハがフォルテやピアノ、リタルダンドなどの要素をふんだんに盛り込んだ、ある意味「歪んだ」楽曲を作っている。⑨の意味が「歪んだ真珠」であることを説いた上で、ボッロミーニ（1599-1667）のフォンターネ聖堂（1638）のドーム写真を仰ぎ見せれば、確かに楕円であることにも気づく。

**４）芸術家らの「揺り戻し」を読み解く**

均整を破る作風が一世を風靡したのち、芸術家らは再び均整のとれた構成美を追求し始める。音楽ではハイドン、モーツァルト、ベートーベンらが活躍した時代⑩だ。18c後半にはイギリスで産業革命も起こり、いよいよ人間中心の時代に突入していく前夜、とみてもいいだろう。

構成美が一世を風靡してしまうと、今度は芸術家らの作風は、人々の感情や印象を表現しようとする方向に動き出す。音楽ではシューベルト、シューマン、ショパン、絵画ではマネ、モネなどの活躍した時代⑪。印象派や自然主義、などともよばれる。世の中の動きと異なる新しい方向性の常なる模索こそが、芸術家の根源の思考回路なのだろう。

建築物の建設は、絵画などに比べて時間のかかるものであることもあり、これらの流れに短期的に影響を受けることは少なかったが、⑪の後期には「新古典」などとよばれる揺り戻しの動きが一部あった。パリの凱旋門（1836）に、黄金比が多用されていることに触れるのも良いだろう。

## ３．西洋建築史；近・現代

18世紀後半の産業革命以降（前章の⑩～⑫に相当）の近代デザイン史については、複数の国や都市で同時並行的にさまざまな動きが生まれ、年表で理解を進めるにはやや無理もある。ここでは欧州の地図を思い浮かべながら、「時空間変化を把握する方法」を提案してみたい。図２に示す図を、下記の①から④の順にトレースさせることにより、大まかなフレームを感じ取ってもらう試みである。

**①イギリスとドイツの一騎打ちの構図を描く**

現在のイギリスの名だたる工業ブランドにはバーバリー、ダンヒル、パーカー等、枚挙にいとまがないが、これらの創業は概ね19世紀半ばである。このころに起こった近代デザイン史の始まりと位置付けられる動きが、ウィリアム・モリス（1834-1896）による「アーツアンドクラフツ運動」（1888）であった。モリスは、安っぽいデザインの工業製品が自国内に大量に出回る現状を憂い、デザイン学校の設立やデザイナーの共同体づくりなどに精力的に動いた。ただし、世界初の運動であるゆえ規範となるものが存在せず、必ずしも成功しない活動も多かったとされる。このような近代デザイン史の初期の動きを押さえているかどうかは、資格試験においても重要な位置づけとなっている（すなわち、出題頻度が高い）ことに触れておくのも刺激的かもしれない。

アーツアンドクラフツ運動の成功と失敗を冷静に見つめて分析しながら、イギリスに追いつき追い越せ、と産業革命にまい進した国がドイツであった。業界団体の「ドイツ工作連盟」（1907）を結成し、また、デザイン学校の「バウハウス」（1919）を設立して周辺国から有能な芸術家を多数招くことにより、影響力の大きいデザインカリキュラムを構築した。無数の優秀な登場人物がある中で、あえて１人に絞るとすれば、バウハウス第３代校長のミース・ファン・デル・ローエ（1886-1969）を押さえておくことでいかがか。

**②ドイツの隣国への影響を描く**

ドイツのバウハウス開校が周辺の国々に与えた影響については、２つの隣国の動きを押さえればよいだろう。１つは、オーストリアの「分離派」（ゼツェッシオン、あるいはセセッションともよばれる）、もう１つはオランダの「デ・スティル」である。

手工業時代のデザイン規範から「分離」して、新産業時代のデザイン規範を作ろう、というのがオーストリアの「分離派」の目的であり、デザインの規範を主に「機能」に見出そうとするスタンスである。建築物では、オットー・ワーグナー（1841-1918）の「ウィーン郵便貯金局」（1912）あたりが代表例か。

一方、スタイリングの議論を突き詰めよう、とする動きがオランダの「デ・スティル」（英語でザ・スタイル）である。まずは形、ということは、素材の議論はちょっと置いておきたいというニュアンスを含み「塗装で素材感をなくす」という独特の発想に結びつく。ヘリット・トーマス・リートフェルト（1888-1964）の「シュレーダー邸」（1924）の外観を提示すると、その考え方は一目瞭然となるだろう。

**③フランス発祥のアール・ヌーヴォーが欧州を席捲する様子を描く**

欧州南部の産業革命は、イギリスから数十年遅れた。温暖な地中海性の気候と肥沃な土地に恵まれ、農業国として十分やっていけたから、というのが通説である。

フランスの工業化の過程で、「アール・ヌーヴォー」(1893頃）のアイディアが生まれると､確固たる工業デザインの規範として、瞬く間に欧州各国に波及した。ドイツではユーゲントシュティール、スペインではモデルニスモ、などと呼び名は様々ながら、自然、特に植物にみられる有機的な曲線の美しさをモチーフとしている。パリコレなど、現代にも脈々と伝わるこのようなフランスデザインの強い影響力の、はたして源は何なのだろう、と学生たちに問いかけることも、興味を掘り下げるきっかけとなるだろう。

フランスではその後、定規とコンパスで描ける「アール・デコ」の提案があったが、当時なぜかあまり受け入れられなかったことや、隣国スペインではガウディの一連の作品にアール・ヌーヴォー（＝モデルニスモ）の影響が明確であることも、関連する魅力的な話題となり得る。

**④アメリカにおける欧州デザインの継承と発展を描く**

③までの過程で、第二次世界大戦前までの構図が描けたが、戦中から戦後にかけてこの構図は崩れ、デザイン史の重心がアメリカへ移っていく。

ドイツでは、ヒットラーの台頭をきっかけにバウハウスは解散（1933）し、有能なデザイナーの多くはアメリカに亡命、活動の拠点はアメリカとなった。アメリカ本土にも有能なデザイナーが多数登場しており、挙げればキリがないが、アメリカのデザイナーの根底にある考え方を垣間見ることのできる以下３名を挙げるだけでも、初学者のための情報としては十分すぎる。

**a）ミース・ファン・デル・ローエ（1886-1969）**

シカゴのファンズワース邸（1950）に触れておきたい。一見華奢なつくりが特徴的であり、建築デザインにありがちなやぼったさを払しょくしている。彼のインテリア家具のデザインにも共通のコンセプトが見られる。インターナショナルスタイル、あるいはユニバーサルスペース、などと銘打ち、世界中どこでも導入できるデザインですよ、とうたっているが、当時のアメリカらしい高飛車さを垣間見るようなキャッチフレーズ、ととらえられなくもない。

**b）フランク・ロイド・ライト（1867–1959）**

ロビー邸（1912）と落水荘（1936）に触れておきたい。当時のアメリカの東部から西部への開拓とともに目の当たりにした大平原を、横ライン強調のデザインモチーフとしてロビー邸に取り込み、自ら「プレーリー（＝大草原）ハウス」と呼んだ。落水荘は、東部ペンシルバニアの森林に溶け込む至極有名な有機的デザインの建築。ここでの話題として外すことはできないだろう。

**c）ルイス・カーン（1901–1974）**

このパートでルイス・カーンを取り上げることにはやや異論もあるかもしれないが、ソーク生物学研究所(1965)のデザインの意味に思いを馳せてみるのも面白い

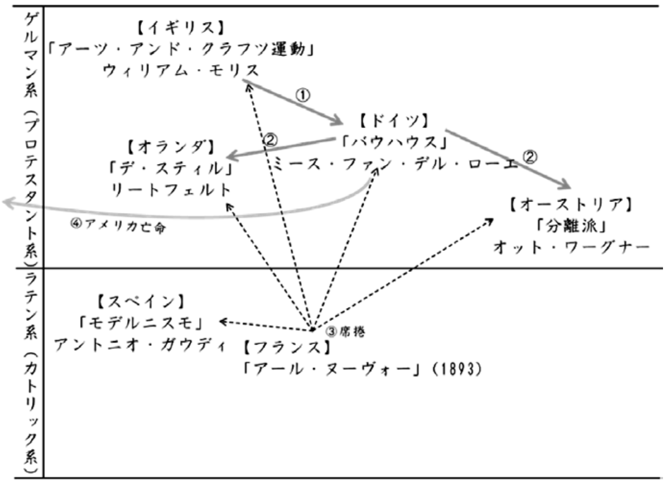


**図２　近代デザイン史における国家間の関係に関する板書の例注2）**

と思う。カリフォルニアの太平洋を望むその姿には「アメリカ本土の西部開拓は済んだ。そして、もっと西へ」（すなわち、ハワイ、アジア、そして日本へ…）というアメリカ人の深層心理が表現されてはいないだろうか。なお、カーン自身はアメリカ東部が活動拠点で、フィラデルフィアのフィッシャー邸（1969）も有名な個人住宅であり、製図の授業のトレース課題などにしばしば用いられている。

## ４．西洋の都市計画史

西洋の都市計画史に関する議論は､カミロ･ジッテ「広場の造形」(1889)、ハワードの「田園都市」(1899)、ガルニエの「工業都市」(1904）と続く論考のあたりからが本格的となった。第一次大戦直前のことであるが、それ以前には、そもそも都市論というものが明確に存在しなかったことは、初学者にとってやや驚きかもしれない。

これらの著作以前は、街のどこからでも拝めるシンボリックな塔をもつ教皇あるいは皇帝の住処を中心に据え、周囲を城壁で囲む、という発想が主流だった。その発想の転換のきっかけは、やはり18世紀後半の産業革命だろう。経済活動の活発化と人口増加により、もはや単独では成立しえなくなった１つ１つの都市を、明確な役割を持つエリアのネットワークとして再構築する案など、都市の経済基盤を確立するための様々な手法が提案された。その提案の向かう先には、幹線道路で地区を囲み、周辺部に商業エリアを置いて経済基盤の一端としようとする､ペリーの「近隣住区理論」(1929）の考え方も透けて見える。

以上の大まかな潮流の紹介だけでも興味を惹くのでは、と思うが、ここで、都市計画関連の以下４名の著作物にクローズアップしてみたい。一級建築士試験においても出題頻度の高い内容だ。

**①　パトリック・ゲデス；　「進化する都市」(1915)**

**②　ルイス・マンフォード；「都市の文化」(1938)**

③　ケビン・リンチ；　　　「都市のイメージ」(1960)
④　ゴードン・カレン；　　「都市の景観」(1971)

①②の著者名と③④の著作物とを「互い違い」に結び付けた選択肢を提示し、誤りを指摘させる出題形式が定番である。初学者は「何のことやら」と苦しむが、そのココロを筆者の見解で紐解くとすれば、①②は第一次大戦の戦中戦後、③④は第二次大戦後、と時代が大きく異なることに注目させたい。すなわち、①②の著作物は「都市にはこんな問題がある」という問題提起主体、③④は「現代の都市発展は、こうやってモデル化してとらえるとよいのではないか」という解決提案主体である。建築士を名乗る以上、このような戦中～戦後の都市の議論の大きな変遷は、原著を紐解かないまでも把握はしておいてほしい、という出題者からのメッセージととらえれば、少しは興味も沸いてこよう。暗記法としては、著者名の頭文字と著作物の頭文字を順に並べて「ゲマリカ－シブイケ」と暗唱できれば、初学者でも解答できる。解答を導く過程で、このような出題の背景に思いが至るようになることこそが重要なのだろう。

都市計画史に関連して、ここで１点補足をしたい。ル・コルビュジエ（1887-1965）の都市計画作品の数々は、専門書の中でもページ数の割合の高い破格の扱いとなっていることは、専門でなくともご存知の方も多いだろう。実現した都市計画こそインドの「チャンディガール」（1951）ただ１つであるにもかかわらず、「300万人の都市計画」（1922）をはじめとして、都市計画関連の作品を膨大に描いた人間は当時ほかにいない。マルセイユの「ユニテ・ダビタシオン」（1952）は、単なる１棟のメゾネット集合住宅として建築史の切り口のみで語られることが一般的だが、そもそもは、同様の棟を複数建設して空中廊下で結ぶという「輝く都市」（1933）構想だったことを知れば、作品の見方も違ってくる。壮大な構想を高度に「可視化」できる数少ない芸術家であったことをやや強めにアピールしながら、やや耳慣れない名前に早々に馴染ませることも、悪くないと思う。

## ５．まとめ

筆者のこれまでの大学や予備校などにおける建築史および都市計画史の授業経験から、西洋建築史や都市計画史を学ぼうとする初学者向けに、導入学習のフェーズで示す意味があろうと考える、古代からの建築様式、および近代デザイン史にみられる国家間の関係のフレームなどを示した。

例えば、近代デザイン史の部分で示した「ドイツから周辺の国々へ」という記述も、実際のところは、一方向的な影響という書き方では語れるものではない。異なる思想の無数の芸術家間に生じたさまざまなコミュニケーションこそが、デザイン史を形作ってきた。そのような本質が本稿では切り捨てられている、とのご指摘も承知の上で、それでは、現時点で何も知らない初学者にどこから切り込ませるのが理想なのか。その初学者が、将来建築技術者として活躍しているであろうとき、ふと専門書を開く機会に、その壮大な文化史、デザイン史のロマンを、自身で掘り下げようと思わせるだけの下地となりえる授業を、はたして提供できているか。検証は困難ながらも、今後もじっくりと向き合っていきたいテーマと考えている。

## 参考文献

本稿における建築家の氏名や建築物の名称の和文表記、および、建築物の建設年や著作物の執筆年の確認は、以下の文献によった。


１）西田雅嗣ほか；「建築の歴史　西洋・日本・近代」，学芸出版社（2014）
２）本田昌昭ほか；「テキスト　建築の20世紀」，学芸出版社（2009）
３）青木裕司；「青木裕司のトークで攻略　世界史B」，Vol.1～２，語学春秋社（2010）
４）黒田智子；「作家たちのモダニズム」，学芸出版社（2003）
５）勝見勝；「現代デザイン入門」，鹿島出版会SD選書（2005）
６）藪亨；「デザイン史－近代デザイン運動の諸相」，大阪芸術大学（2001）
７）阿部公正；「カラー版世界デザイン史」，美術出版社（2011）
８）ジョナサン・バーネット；「都市デザイン－野望と誤算」，鹿島出版会SD選書（2000）
９）五十嵐太郎，菅野裕子；「建築と音楽」，エヌティティ出版（2008）


## 注

１）厳密には、音楽については「記譜法」が発明されたルネッサンス以降の様式が適用できる。それ以前の音楽は「中世音楽」と一括りにされることも多いが、実際にどのような音楽であったかは、各種の伝承音楽や、世界中で発見される古楽器の姿などから類推せざるを得ない。建築からやや離れる話題ながら、古代史～中世史にはこのような途方もない研究分野があることを紹介することも、ロマンを掻き立てる一つの切り口になる可能性もある。

２）ゲルマン－ラテン、プロテスタント－カトリック、等の二項対立的な表現は、初学者への話題提供の方法としては必ずしも適切でない部分もある。半期15回の授業で「実はそう単純でもない」ことの理解までどうたどり着かせるか、も検討すべき大きなテーマと考えている。